忙しさとむなしさと…

忙しさとむなしさと

向山陽子

この題をいただいた時、私は思わず笑ってしまった。私の中に「忙しさとむなしさと」にぴったりとくる部分があるためだろうか。

〝忙…物事を忘れる原因となる忙しさを表わす〟

一学期が終った。たった一〇〇日で、あんなに成長する子ども達と先生達。

体が続くのは情熱があるからと…精神主義に陥りたくなるような忙しさの中で、もっとまめに体が動き、もっとまめに気が配れる保育者になりたいと言い、自分を研く同僚の中にいて、私も成長できそうで、夢中でこの一〇〇日を過ごしてきた。

我園では、教諭には実質五〇日間の夏期自宅研修がある。一学期間に使い果たし、すり切れはじめた感性に充電しようと、空白の非日常にとびこんではみたものの、動き続けている〝忙〟の歯車は急には止まらない。日頃できない家の掃除、整理整頓等にとり組んで、一週間が過ぎようとする頃、ギッギッギーッとやっと歯車は止まり出す。

何をする気もせず、何も考えず、何も感じない、ただボケーッと空っぽになって、空を見て寝ころぶ二～三日がくる。

〝虚…充・実の反①おか・大きな丘②むなしい、から、なかみがない〟とはこれなのか…？

もっとポッカリと心に穴のあいた日があったっけ……

一年半前の修了式の日、年長組のみを担任したクラスだったけれど、私に多くの事を教えてくれた大好きな子らを送る日だった。

朝、幼い彼らにとって、初めての別れという人生の区切りを共にのりこえようと、又、一年間の私との関わりの最後の日を、思いきり深い色で染めあげようと、一人一人の登園を迎えた。

「みんなはいいな、小学生になって…。

先生(私)だけ幼稚園……」「先生だって次の子(新入園児)が入ってくるからいいじゃない」二〜三日前、あっさりといってのけたM子が、大きなきれいな目でじっとみつめて抱きついてきた。「僕、幼稚園にいたいな、好きだもゝ」と背中にとびつくT。「先生、はい」と、折り紙の花をさし出すA子。毎日のように続いた彼女の最後のプレゼント。

一列に並ぶ、私の後に彼らが続いて入場。入場後は彼らだけで席へと進む。

〝私はここで見ているから、立派に歩こうね。おかあ様達に見せてあげて〟と心の中で。彼らは、緊張した顔で私を見上げた後、拍手の中を自分の足で進んでいった。

Kの立派なこと、Yがあんなに堂々として。H、いつの間にあんなに大きくなったの。Mの自信にみちた背中、……みんなもう立派な一年生、私の役目はもう終ってしまった。私の横を通りすぎていってしまった。お母さん方はいいな…まだあの子達と一緒に歩けるのだもの……笑い、恐り、泣いて彼らと過ごした日々が急に馬鹿馬鹿しくなり、遠のいていった。

式は、多くの人に感動を残して終えたけれど、彼らとの約束どおり、一人一人とうなづきあって名を呼んだ修了証書授与式だったけれど、私の横を彼らが通りすぎ、歩いていったあの瞬間から、遠い映像を見ているようで私には泣くことも笑うこともできなかった。

今、こうして思いおこすと、あの瞬間に人と人との真実を見、保育の真理をのぞいたと思える。

あの時から私は、保育を一人で抱えこまなくなった。私中心の保育から、子ども中心の保育へ近づこうと、子どもの前では自分を無くそうと努めるようになった。

私が保育するのではなく、子どもがいて、園があり、父兄がいて、理事がいて、園長がおり、教員がいる、木々があり、モルモットもいる。その中に私もいて、保育状況が生まれることに気づいたのかもしれない。

その翌年度から研究部主任として、クラスをもたず、全体の保育をする役割となった。つかみどころのないまさに空虚な毎日が続いて、今は二年目。環境整備や、若い先生方が保育しやすいように支えることが私の仕事とわかりはじめ、それなりの喜びも見い出せるようになってきた。クラスのない虚しさは未だにつきまとうけれど。

保育――それは虚空のように広大で深淵な世界であり、私個人が必死になったところでどこまで行きつけるかわからない知恵と、慈悲心に満ちた世界のようだ。

でも、そこには、ひろ君の笑顔があり、なおみちゃんとY先生のぶつかりあいがあり、りょう君の変化や、のぶ君を思うO先生があり、「私にはわからない」と泣きながらも成長しようとする若いK先生や、歯をくいしばるM先生の素晴しさがある。

可能性がいっぱいの子どもらと、若い先生達がいる。私は、大和郷幼稚園を愛しはじめたようだ。

(東京・大和郷幼稚園)